

論壇の一年

中 嶋 嶺 雄

「諸君」一月号のつと、靖国神社に働きかけたというのである。これに對して東條英機の遺族が不満を表明したのは当然であろう。

靖国問題の死角

靖国神社の公式参拜への道をつけようとしてきた中曾根首相は、A級戦犯が靖国神社に祭られていることに中国が強い不満を示したので、A級戦犯合祀（こうし）の取り下げをはかるというのであ

靖国問題の死角

靖国神社に働きかけたまま政府が受け入れたことを、国際的に宣伝するに等しい。山本七平や渡部昇一は、いまこそ怒るべきではないか。

靖国問題の死角

靖国問題の死角

靖国問題の死角

テーマに事欠かぬが収穫は乏しく……
円高、貿易摩擦、国際化、チェルノブイリ、SDI、自民党三百九議席、藤尾発言、中曾根失言、天皇在位六十年、ポスト・モダン、それにエイス感まで加わって、今年も論壇はテーマに事欠かなかった。



変貌する論壇の地位、経済人向け言論人が大活躍

題に直面してはながら、いわゆる論壇誌を巡視してみて、強く印象に残る文章を探すとすると、その数はきわめて少ない。やはり言論そのものの衰弱なのだろうか。それとも本年度の菊池寛賞受賞者・徳岡孝夫がかつて述べたように「書きこぼし、読みこぼし」の風潮がますます甚（し）んでいるためだろうか。

そうしたなかで、いわゆる論壇なるものが日本社会に占めてきた地位もいまや大きく変貌（へんぼう）しつつあり、従来の学者・文化人中心の論壇にかわって、ビジネス・エ

リート向けの言論人が今年も大活躍であった。長谷川慶太郎、堺屋太一に加わって、

本年は、大前研一（「円高が教える新・国富論」）、「第三次春の五五号」。「第三次春の五五号」。「第三次春の五五号」。

地解放のすすめ（八月号ほか）や唐津一（「米国経済の破綻」）、「Voice」十月号ほかといった新しい旗手が多くの読者に迎えられた。これらの論者に石井威望、飯田経夫、香西泰、日下公人ら各種経済誌にもよく登場する

文化



朝比奈 隆・画

とらで、より正統的な意味での論壇における本年の収穫を問われれば、「国際化」という重要なテーマに因（よ）り、

日本文化の自己像に迫った力作二編

この点では佐伯彰一・藤田光一・前田愛・西尾幹二の討論「高度成長」とは何であったか（「諸君」二月号）、

木村尚三郎「反進歩の世紀末」（「Voice」二月号）などが注目されよう。このよ

うな豊かな社会の空気に迫った二人の才媛（さいいん）として、リベラルな国際的視野に立つ猪口邦子「世紀末から新世紀へ」（「世界」九月号）の活躍が目立ち、その対称点に位置するのがナショナルな思考に立つ長谷川三千子「大和と演説」（「Voice」九月号）であるのは興味深い。

政治的事件となった藤尾発言や靖国問題、教科書問題については、やはり江藤淳の二つの文章「生者の視線と死者

の視線」（「諸君」四月号）、「総理官邸の事前検閲」（「同」十一月号）を逸するわけにはゆかない。

また林健太郎「教科書問題を考える」（「文芸春秋」十月号）も安心して読めるものであった。これらの問題と中岡との関連については、私も「中国に呪縛される日本」（「諸君」三月号）を書いている。

ポスト・モダン潮流のなかで東京論が盛ん（「二、三年、わが国の知の世界」をとりえたポスト・モダンの風潮にたいする批判としては、竹内芳郎「ポスト・モダンにおける知の陥穽」（「世界」十一月号）を挙げておこう。竹内にははるべき陥穽（かんせい）を衝いた。ポスト・モダンの潮流のなか都市論、とくに東京論が盛んで、粕谷一希編集の「季刊 東京人」も発刊された。

「世界」の特集（七月号）「東京論ブームの裏側」もあった。

その東京の昔の懐に結局は回帰している、本紙にも見事な「東京私記」を書いた安田武は本年、ついに万に倒れ、安田と好対照の軌跡をたどりつつあった船川信夫も逝ってしまった。かくして論壇もまた流転してゆく。

（東京外国語大学教授・国際関係論）

二氏に親・世寿夫記念・能楽賞
第8回親世寿夫記念法政大
学能楽賞は、大蔵流狂言方の

受賞者それぞれ喜びや抱負語る
菊池寛賞と大宅壮一ノンフィクション賞贈呈

第三十四回菊池寛賞と第十
七回大宅壮一ノンフィクシ